

豊かなコミュニケーションを通して、 患者さんの立場に寄り添いたい

患者さんの笑顔に励まされ、助けられてきたという水井歩さん。「管理栄養士としてもっと成長できるように、自分自身を高めていきたい」と語ります。



めざす管理栄養士像を書いてもらいました

先輩の患者に寄り添う姿勢に 憧れ、病院に就職

私は料理やお菓子づくりが好きで、高校は調理師養成学校に進みました。進路を考える際、担任の先生や両親から「もっと学んで視野を広げるのも良いのでは」と勧められました。私自身は、迷いもありましたが、栄養学や調理理論をもっと学んでみたい気持ちもあり、大学進学を選びました。

最初のうちは管理栄養士として働くことに消極的な思いがありました。栄養指導は教科書に沿った理想通りの食事の指導をしなればいけないという先入観があり、そんなにきちんとはできるだろうかという不安や、患者さんの人生に関わることに怖さを感じていました。

しかし今勤務している広島赤十字・原爆病院での実習をきっかけに、イメージが変わり、病院で働きたいと考えるようになりました。管理栄養士は患者さんそれぞれの生活背景に合わせた指導をされており、患者さんは先輩方と話す際、表情がいきいきとしています。

さらに当院では、患者さんの意見を積極的に給食内容に反映しだるようになりました。患者さんには、「今までこんなふうにはやってきたのが良くなかったんですよね」とネガティブなことを言われることが多いですが、今できていることや今あるままを受け止め、笑顔で明るい話し方を意識しています。

給食管理では、日々の食数管理や配膳確認、院内保育所と検診者食の献立作成と発注を行っています。任せてもらえる業務が増えるにつれて、見落としも増えてきました。先輩方がされてきた細かい配慮を私自身もできるようにならないといけないと考えています。

当院ではニユーククックルによる給食提供を行っており、献立作成を任せられるようになりました。作業工程を把握し、業務効率を考えないとできない業務ですが、上司からやってみないかと提案もあり、挑戦したいと考えています。

先輩方からは「頼りにしている」「安心して任せられる」と言っていただけの機会も増えました。失敗しても成功の元と考え、一つ一つの業務の意味・意図を理解し、周りの状況を見て行動することで確実な仕事をしていきたいです。

て、食事量を増やすための工夫をしており、給食管理にも取り組みたいと思っていたので、魅力的に感じました。偶然にもご縁があり、卒業後には憧れていた当院へ入職することができました。

介入を提案し、多職種により栄養改善に向け取り組んでいます。入院患者さんには栄養ラウンドで、定期的に「治療にとって栄養が必要であること」をお話ししています。食事ができないこと自体へ不安を感じている患者さんも少なく、病室に行つて食事の話をするとう喜んでくださり、食べる意欲が増す患者さんも多いです。これまで以上に、患者さんにとつて、身近で気軽な存在になれたらと思っています。

現在は栄養指導業務と給食管理業務の両方を行っています。栄養指導業務では、外来及び入院の栄養指導を診療科問わず行っています。病棟は血液内科を先輩と3名体制で担当し、栄養管理計画書の作成や栄養状態の再評価時の栄養ラウンドなどを行っています。

初回の栄養指導で、「医師に言われたからしょうがなく来ました。自分で調べて食事制限をしているので、もうこれ以上制限は嫌だから聞きたくない」と言われたことがあります。

特に今はGLIM基準での低栄養診断・栄養管理に力を入れています。GLIM基準の低栄養診断・重症度判定を用いることで、入院時から低栄養リスクのある患者さんを見つけることができ、早期に栄養介入できるようにになりました。

食事に対して辛そうな様子でしたので、まず食事管理は制限することだけが目的ではないことをお伝えし、今の生活環境と思いを聞き取りし、もっとこうすれば楽にできるのでは？と提案をしました。2回目は「言われたとおりやったら数値が改善して、食べるのが楽しくなった」と言っていた

低栄養に該当する入院患者さんの下腿周囲長を測定し、現在の摂食状況を確認します。食事摂取量が少ない場合には、さらに聞き取りをして、状況に応じて、医師に適切な食形態、食べやすい食事への食事変更やNST・栄養指導の

き、その後も栄養指導を受けてく



低栄養に該当する患者は、下腿周囲長を測定している。その際、食事摂取状況の聞き取りを行い食事の調整が必要な患者は継続的にラウンドを行う。

患者さんの話に耳を傾け、よく観察し、寄り添った提案ができるように心がけています

日本赤十字社
 広島赤十字・原爆病院 栄養課 / 管理栄養士
 みずい あゆむ
 水井 歩さん